

日本語の指示詞コ・ソ・アの使い分けに関する 言語心理学的研究

東京大学教育心理学研究室 遠 藤 め ぐ み

Psycholinguistic research on Japanese demonstratives KO/SO/A.

Megumi Misawa ENDO

Recent research on KO/SO/A, i.e. the Japanese demonstratives whose initial syllable is ko, so, or a, was reviewed. In order to clarify the mechanism of the use of KO/SO/A, need for empirical research was suggested.

I. 序 論

A. 問題と目的

日本語には「これ、それ、あれ、どれ」「この、その、あの、どの」等、コ・ソ・ア・ドを語頭に持つ一群の語があり、これらは「こそあど」あるいは「指示詞」等と呼ばれる(佐久間, 1955)。本稿で問題にするのは疑問詞の「ド」を除いた「コ・ソ・ア」である。

さて、指示詞を含む発話、例えば「それ、取って」は、その発話だけから「それ」の指すもの(指示対象)を理解することはできない。このような特徴を持つ指示詞の産出・理解には、どのような心理学的メカニズムが働いているのだろうか。

指示詞を理解するために、聞き手は、話し手と聞き手に共有された基盤、すなわち、共に聞いた言葉・共に見たり経験したりしたこと・話し手と聞き手の属する共同体の誰もが知っているようなことを基に推測する(Clark, Schreuder, & Buttrick, 1983; 見澤, 1986)。一方、話し手は、聞き手が文脈の手掛かりを基にして理解できるような発話をするものと思われる。van Dike & Kintsch (1983)は、テキスト中の指示詞を読み手がいかに理解するかということ、テキスト理解のモデルに組込んでいく。彼らは、読者・聞き手がテキストを理解する過程で構成するテキストの心的表象をテキスト表象、テキストによって描写された場面の心的表象を状況モデル(a situation model)と呼び、両者を区別した。そして、指示対象は、発話あるいはテキストを基に構築される状況モデル中から探し出されると考えた。すなわち、聞き手は、作業記

憶内の情報、テキスト表象から復元された情報、あるいは、一般的世界知識からの推論を基に、指示対象を同定する。

先に挙げた例「それ取って」を理解するために、Clark et al.が指摘するように、聞き手は、話し手と聞き手が共に見たり経験したことを利用する。その際、話し手・聞き手・指示対象の三者間の物理的位置関係とその認知の仕方が、理解に影響してくると思われる。van Dike & Kintschのモデルでは、テキスト中に先行詞があるような場合を扱っているために、物理的位置関係やその認知の仕方といった側面は考慮されることがなかった。しかしながら、会話の理解・産出を考えていくためには、話し手・聞き手・指示対象の三者間の物理的位置関係とその認知の仕方というような側面もモデルに組込んでいくことが必要であろう。このような側面を考える上で、指示詞コ・ソ・アの使い分けは、格好の材料になると思われる。

ところで、類型論的に見ると、日本語の指示詞は、「聞き手に近い」空間を持つ類型(H型)の中で3つの空間分割を行う3H型に属する。このような指示詞をもつ言語は、他にも韓国語、トルコ語、イタリア語、スペイン語等があり(吉田, 1980)、世界的に見て決して特殊ではない(影山, 1987)。しかし、コ・ソ・アの用法は単純ではなく、国語学的には、古くから関心が持たれてきた(江戸期と明治前期の研究の概観は古田, 1980; 1833~1941年の研究の概観は高橋・鈴木, 1982)。

外国人に対する日本語教育においても、コ・ソ・アは大切なトピックの一つである(佐治, 1971; 森田, 1987; 寺村他, 1987)。母国語との対応を考えると、2分型の指示

詞を持つ英語、フランス語、ドイツ語、中国語等を母国語とする外国人の日本語学習者の戸惑いは容易に推察される。事実、これらコ・ソ・アの使い分けには、外国人の日本語学習者の誤用が多く見られる(寺村, 1988)。3分型の韓国語についても、日本語と韓国語の指示詞の体系にはズレがあり、そのズレがあるところに韓国人のコ・ソ・アの誤用が最も多く現れる、との研究がある(Shinn, 1985)。

以上のように、コ・ソ・アは国語学的にも、日本語教育においても興味深い問題である。コ・ソ・アの使い分けには、話し手の心理的な要因が影響すると考えられているが、それらを明らかにするためにも、用例を中心に考えていくような従来の国語学的研究に加えて使い分けに影響する変数を取り出してその効果を実証的に追究しようとするような言語心理学的アプローチが必要であろう。本小論は、コ・ソ・アの使い分けに関する近年の研究を言語心理学的視点から整理し、今後の研究への足掛かりを作することを目的とする。

B. 指示, ダイクシス, 照応

コ・ソ・アは、それ自体で意味的に解釈されるのではなく、その解釈のために他の何かを指示するという意味で(Halliday & Hasan, 1976)、指示(reference)という機能を持つ言語形式の一つである。Bühler(1982)が、ダイクシス表現とはそのゼロ点(Origo)が話者(the 'I')・発話の場(the 'here')・発話の時(the 'now')によって固定された言語のダイクティックな場を指示するものであるとし、その派生的現象として、照応やDeixis am Phantasma(想像のダイクシス)を説明しようとして以来、数多くの指示の体系が言語学者によって提案されてきた(Kryk, 1987, p. 31)。しかし、一般に、指示はダイクシスと照応に大別して考えられている。

例えば、話し手が聞き手が身に付けているネックレスを指して、「まあ、それかわいい」と言った場合、この発話は、発話者、発話の場、発話の時がわかってはじめて正しく解釈される。このような指示をダイクシスと言う。すなわち、ダイクシスには、つねにorigoを持つという特徴がある(McNeil, 1987)。ダイクシスは、直示、眼前指示、現場指示、テキスト外指示(exophora)等とも呼ばれる。一方、照応(anaphora)の場合、指示対象は先行あるいは後続する言語的文脈を参照して同定される。このような指示は文脈指示、テキスト内指示(endophora)等とも呼ばれる。ダイクシスは文をorigoに結びつけるのに対し、照応は文と文とを結びつける(McNeil, 1987)。

ダイクシスと照応の関係については、二つの見方があ

る。一つの見方は、両者の機能は同じと考える。すなわち、照応はダイクシスの特殊な場合であり、指示対象が文脈に言語的に導入されるのに対し、ダイクシスではジェスチャー、共有された知覚・知識によって導入されるのだと考える(Klein, 1982)。もう一つの見方は、両者の機能を対照的に捉える。すなわち、ダイクシスは特定の対象に聞き手の注意を焦点化しようとするのに対し、照応は聞き手が以前に注意を向けた特定の対象に焦点を当て続けさせようとする(Ehlich, 1982)。

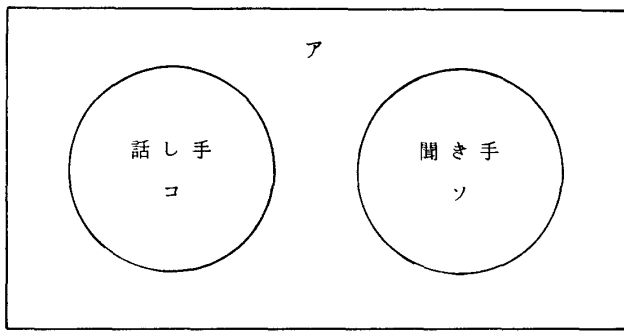
II. ダイクシス

A. 文法

コ・ソ・アの指示領域について、これまで数多くの議論がなされてきた。大槻(1897)は、話し手から対象までの距離によってコ・ソ・アを区別した。佐久間(1955)は、聞き手を導入し、話し手の手の届く範囲内はコ、聞き手の手の届く範囲内はソ、こうした勢力圏外はアに属するとした。三上(1955)は、話し手と聞き手が対立する場面と、話し手と聞き手が「我々」としてぐるになる場面とを想定し、第一の場面ではコレ対ソレ、第二の場面ではコレ対アレという対立があったとした。

近年では、上の三つの説を基にした再検討、発展が盛んである。近年の諸説は、主に次の二つの立場に分けられるものと思われる。

第一の立場は、大筋としては、三上の二つの場面を認め、それぞれの場面に佐久間と同様に話し手と聞き手を入れてコ・ソ・アの使い分けを説明する(柴田, 1980; 正保, 1981他)。略図的に書けば図1のようになろう。正保は、第一の場面对立型、第二の場面对融合型と呼び、いずれの状況でもコ・ソ・アのすべてが出現すると考えた。対立型では、話し手が、自分のなわばりにあると認定した人/物にはコが、話し手が聞き手のなわばりに属するものとして認定した人/物にはソが、話し手が、「自分」の領域にも、「相手(聞き手)」の領域にも属しないと考えたものにはアが用いられる。一方、融合型では、それに対する「我々(話し手と聞き手)」の関心の強いもので、近くにある人/物にはコが、アで指すには近すぎる物、もしくは、話し手と聞き手のいずれか一方あるいは両者の視野になく、遠くにあるものにはアが用いられる。ここで、同じソでも、対立型におけるソは積極的に認知されたものであるのに対して、融合型におけるソは影の薄いものである、と考えた。



(a) 対立型

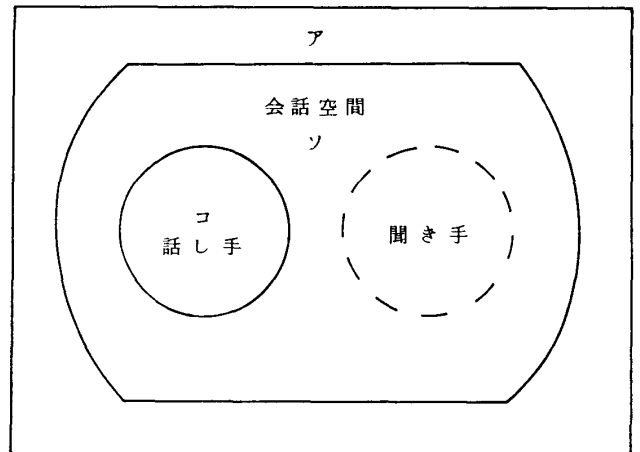
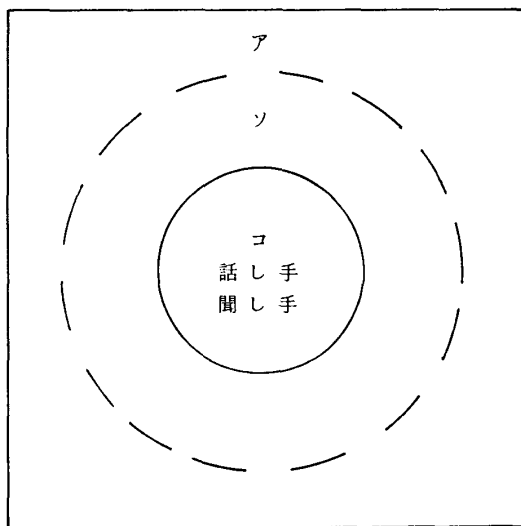


図2 コ・ソ・アの使い分け(2)



(b) 融合型

図1 コ・ソ・アの使い分け(1)

第二の立場は、主に、話し手の領域あるいは主観に基づいてコ・ソ・アの使い分けを説明しようとし、使い分けの説明に聞き手の領域を積極的には用いない(阪田, 1971; 堀口, 1987; Kitagawa, 1979; Yoshimoto, 1986他)。略図的に書けば、図2のようになろう。Yoshimotoは、話し手と聞き手それぞれの個人空間、および、話し手と聞き手を囲み、それらの個人空間をも含む会話空間とを想定した。会話空間の外にある事物はアで、会話空間内にあると同時に話し手の個人空間内にもある事物はコで、会話空間内にあるが話し手の個人空間の外にある事物はソで指示されると考えた。

以上のように、近年の研究はコ・ソ・アを使い分ける話し手の、心理的な場の捉え方に着目し、それを、縄張り、個人空間、領域等の用語で説明する。これら縄張り等は、物理的距離によって規定されるのではなく、主観的、心理的なものと説明される。しかし、何が、どのようにして、縄張り等の心理的な場の捉え方の形成を規定するのか、ある一時点での話し手の縄張り等はどこからどこまでなのか、縄張り等が自由自在に伸縮するとしたら、何がその伸縮を引き起こすのか、に関して明瞭な説明がなされていない。また、物理的距離にしても、話し手の身体の中の部分から対象までの距離を指すのか、あるいは、話し手の手を伸ばしたり、棒を持ったりという指示動作が伴う場合はどうなのか、という点まで詳しく説明されていない。

匹田(1981)も指摘するように、ダイクシスのコ・ソ・アの用法を調べるのに、文学作品などから例文を集め、帰納的に法則性を見いだそうとするのは、効率のよくない方法である。具体的位置関係がはっきりしている場面で、実際に、会話者がどのように指示詞を使い分けているかを調べることで、従来の文法的研究では明瞭に説明されてこなかったような点について、解決の糸口が得られることもある。次に、そのような実証的な研究を見ていこう。

B. 実証的研究

コ・ソ・アの使い分けに関する実証的研究について、成人を対象とした研究と、発達の研究とに分けて、これまでの研究成果を概観しよう。

1. 成人を対象とした研究

高橋・鈴木(1982)は、成人のコ・ソ・アの指示領域について実験を行い、コ・ソ・アの指示体系は、話し手と聞

き手が接近しているかないかによって二つに分かれると結論した。すなわち、第一に、話し手と聞き手が接近している場合、話し手および聞き手から対象までの距離の遠近によってコ・ソ・アが使い分けられる。第二に話し手と聞き手が離れている場合は、話し手は、聞き手の領域をソ系であらわしながらも、話し手独自の領域をつくり、話し手から対象までの距離の遠近によって、コ・ソ・アを使い分ける。

今井 (1978) は、2つの人形を用いたミニチュア場面で、人形の並べ方 (並立条件・対面条件) × 人形間距離 (3条件) の6条件での指示詞の産出を検討した。その結果、第一に、並立条件・対面条件とも人形間距離の増加とともにコレおよびソレの領域の面積が増加すること、第二に、並立条件と対面条件とでは、コレ・ソレの指示領域の形状、大きさが異なること、さらに、指示領域の形状に関して個人差が見られ、A. コレの領域の周囲をソレが取り囲むタイプ、B. ソレの領域がコレの領域全体を覆うことなく、コレ・ソレ・アレの3領域の接点が存在するタイプとがあることが見出された。タイプAをとる被験者のほうが多く見られた。

Higashiyama & Ono (1988) は、人形によるのではなく、被験者が実際に置かれた対象をココ・ソコ・アソコで表すという、より生態学的に妥当な方法で、今井の研究を再検討した。また、実験的な指示空間領域の信頼性を見るために、話し手と聞き手の間の距離の影響を調べた。さらに、英語を母国語とする話し手を対象に、指示詞 here, there の領域を実験的に調べた。その結果、日本語では、話し手の近くの領域にココ、聞き手の近くの領域およびココの外側の領域にソコ、ソコの領域を取り囲む領域にアソコを用いる、という単極的な反応がほとんどだった。これは、今井の結果と一貫する。また、話し手と聞き手の間の距離の増加は、ソコの領域を増加させたが、ココの領域にはそれほど影響しなかった。英語では、話し手の回りの領域に here が、それを囲む領域に there が用いられ、here の領域は、話し手と聞き手の間の距離が増えると増大した。Higashiyama & Ono は、ココ・here の領域を個人空間との関係で考察した。

門松 (1979) は、話し手と聞き手が隣り合って座る場合と、3.5m 程の距離を隔てて向かい合って座る場合の指示詞の使われ方を比較した。その結果、話し手に近いものにコレ、聞き手に近いものにソレ、両者から遠いものにアレが用いられる傾向が見られた。ただし、聞き手に近いものに対しては、アレの使用も多く見られた。また、いずれの場合にも、コ・ソ・アの三つが現れた。

遠藤 (1988) は、コ・ソ・アの使い分けを規定する要因

として、操作可能性を考え、これがコ・ソ・アの使い分けに及ぼす影響を調べた。操作可能性とは、話し手が、身体・補助物等を用いて、対象を聞き手にわかるように明瞭に指し示すことのできる可能性である。また、門松 (1979) の実験で、成人が聞き手の近くの対象をアレと言うことが多く見られた原因に、心理的空間において話し手が実験者を聞き手として認知しなかったという可能性が指摘されていたことに基づいて、逆に、話し手が聞き手を非人格化しやすい状況をつくり、その影響を見た。聞き手を非人格化しやすい状況とは、聞き手(ある状況の中で聞き手の役割を取ると期待される人間)を聞き手(話し手とのコミュニケーションに参加している、聞き手としての役割を担った人間)として認知しにくい状況のことである。さらに、ソの使用と聞き手の関係についても検討された。その結果得られた主な結論は、以下の三点である。1. 話し手の操作可能性の増大あるいは減少にともなって、コで指示される範囲は拡大あるいは縮小する。2. 話し手が聞き手(ある状況の中で聞き手の役割を取ると期待される人間)を非人格化しやすい状況では、聞き手の近くの対象がソで指示されることが減少する。3. 指示詞ソについては、聞き手の近くの対象を指示するソと、話し手から中位の距離の対象を指示するソとが見られる。話し手が聞き手(ある状況の中で聞き手の役割を取ると期待される人間)を聞き手(話し手とのコミュニケーションに参加している、聞き手としての役割を担った人間)として認知することが、聞き手の近くの対象の指示にソが使われるための必要条件の一つである。一方、話し手からの距離によって用いられるソは、聞き手の位置や聞き手の非人格化の影響を受けにくい。ソの使い方には個人差が見られ、聞き手の近くの対象のみでなく話し手から中位の距離にある対象のいくつかにもソを用いるタイプと、聞き手の近くの対象のみにソを用いるタイプとが見られる。

遠藤 (1989) は、遠藤 (1988) に基づき、聞き手の近くの対象を指すのに使われる指示詞ソには、対話者間のダイナミクスに規定される側面があると考え、それを両対話者の操作可能性という観点から検討した。具体的には両対話者が距離を隔てて対面する状況で、基準となる対面条件と、対象に対する聞き手の操作可能性を増大させるために聞き手が対象を棒で指す棒条件を設けた。これら二条件の比較から、対象に対する聞き手の操作可能性を人為的に増大させることが、その対象を指示詞で表現することを求めている話し手の指示詞の使用にどのような影響を及ぼすかを検討した。その結果、第一に、聞き手の操作可能性がより強く及ぶと考えられる聞き手に近い範囲にはソが、話し手の操作可能性がより強く及ぶと考えられる話し

手に近い範囲にはコが、両者の操作可能性が余り及ばないと考えられる両者から離れた範囲にはアが、多く用いられた。第二に、対象に対する聞き手の操作可能性を人為的に増大させた場合、話し手の指示詞ソの使用は、話し手の操作可能性がそれほど強く及んでいない範囲では増加した。ただし、話し手の操作可能性がより強く及んでいる範囲ではあまり増えなかった。これは、話し手の操作可能性がより強く及んでいる範囲では、聞き手の操作可能性が増大しても、それが話し手の操作可能性と拮抗してしまうために、ソが使われにくかったのだと考えられる。このように、ソの使用は、両対話者の操作可能性の相対的強さに影響される側面を持つことが示唆された。

このように、操作可能性という概念を使うことによって、縄張りが自由に伸縮する、あるいは、相手の縄張りに属すると話し手が認定したものがソで指される、等、文法的に説明されてきたことのみならず、より具体的に明らかにされてきたものと思われる。例えば、歯医者に歯の治療を受けているときに、自分の歯であるにもかかわらず、「痛いのはこれですか」と聞かれて、「はい、それです」と答えるような例も、話し手が、自分自身の歯に対して、話し手自身の操作可能性よりも歯医者さんの操作可能性のほうが大きいと認知したためにソを用いたのだと説明できる。

中藤ら(1987)は、Duchenne型筋ジストロフィー者(DMD)の視知覚空間の特性を表す指標として、コノ・ソノ・アノを用い、ソノとアノの境界距離は年齢が高くなるほど増大し、ソノによって指示される空間が拡大していくこと、コノとソノの境界距離は年齢が上がっても増大しないこと、また、高校生の健常者に比べ高校生のDMDはコノとソノ、ソノとアノのいずれの境界距離も小さいこと等を見出した。

この結果も、操作可能性の概念によって説明することができる。つまり、DMDは、筋萎縮により手があまり伸びないので、対象に対する操作可能性が小さい。そのため、コノとソノの境界距離は年齢が上がっても増大しないのではなかろうか。

芳賀(1987)は、コ・ソ・ア・ドの心理的距離を、意味微分法を用いて測定しようとした。その結果、近い-遠い の尺度に関して、大きな違いが認められた。

以上、話し手・聞き手・対象の位置関係や物理的距離が統制された実験的な状況等で、話し手がコ・ソ・アをどのように使い分けているかが明らかにされてきた。そこでは、必ずしも文法から予測された通りの指示領域が得られたのではなかった。近年の文法では、コ・ソ・アの使い分けは、対象に対する話し手の主観、関心の強さ、心理的縄

張り等の心理的要因に影響されると考えられている。今後は、このような心理的要因の内容を、実験的方法によって、より具体的に明らかにしていくことが必要だろう。操作可能性による説明は、そのような試みの一つとして、有望なものであると思われる。また、外国語における指示詞使用のメカニズムと比較していくことによって、操作可能性という要因がどの程度普遍的であるのかを検討することも課題である。

2. 発達の研究

日本語の指示詞についての言語習得の研究は、千葉・杉村(1987)に指摘されているように、それほど多くはない。英語では、指示詞はもちろん種々のダイクシスに関する言語習得の研究が蓄積されてきていることを考えると(概観は、Wales, 1986参照)、日本語の指示詞をはじめとするダイクシスの習得に関して、今後研究されなければならない課題は多い。

指示詞の出現順序については、大久保(1967)や岩淵他(1968)の観察記録から、まず、コ系とア系があらわれ、ソ系の出現は遅れてあらわれることが知られている。

久慈・斉藤(1982)は、1:0から2:5の子供を持つ母親24人に、約8ヶ月に渡り、一週間に一度指示詞を含むダイクシス語の出現の有無をチェックしてもらった。それによると、コソアド語はだいたい1歳後半から出現しはじめ、2歳後半になると、ほとんどの語が使えるようになった。コ系は早く獲得されるが、ココ、コレ、に対立するはずの、アソコやソコ、アレやソレがなかなか出現しないことから、ココ、コレがダイクシス本来の、対立語を意識した次元的意味でなく、単に代名詞的な意味(絶対的用法)でのみ使われている可能性が示唆された。さらに、久慈・斉藤(1982)は、視点変換能力などとの関係や、往来動詞「行く/来る」、授与動詞「あげる/くれる/もらう」、人称代名詞の使用との関連からも、コ・ソ・アの獲得を論じている。

斉藤・久慈(1983, 1985)は、1, 2歳児の母子相互作用場面、および、3, 6歳児の2, 3人集団における自由遊び場面で、指示行動を観察し、指示代名詞の使用と指示機能についてVTRに基づく詳細な分析を行った。そこでは、話者の視点に基づく対比関係のみでなく、データから帰納された4つの認知的対比関係、すなわち、A. 個人内二事象の対比か個人間二事象の対比か、B. 現前二事象の対比か、現前事象と非現前事象の対比か、または非眼前二事象の対比か、C. 共通性対比か、差異性対比か、またはそれ以外の中立的対比か、D. 1対1対比か、1対多対比か、1対他対比か、の4つの対比関係が分析された。これらの対比関係は、現前指示、文脈指示、その中間的指示と

の関連で論じられ、現前指示→中間的指示→文脈指示という発達の道筋が示唆された。またコとソ、コとアの対立といった、話者の視点に基づいた意味的対比については、1, 2歳児では未熟であるが、4, 5歳児になると可能になり、ソによる文脈指示も4, 5歳児になると可能になることが見出された。

次に、コ・ソ・アの意味的対比機能の獲得に関する実験的研究を見よう。

上野他(1979)は、被験者が話者となる実験、聴者となる実験、傍観者となる実験を、それぞれ、3歳から6歳、6歳から10歳、6歳から11歳を対象に行った。コッチ・ソッチ・アッチを含む文の理解実験から、コッチ、アッチ、ソッチの順で習得が進むことが示唆された。

斉藤他(1981)は、2, 3歳児を対象としてコッチ・ソッチ・アッチの理解実験を行った。子供と実験者が並ぶ同側条件と、子供と実験者が距離を隔てて向かい合う逆側条件

とが設けられた。その結果、同側条件におけるコとアの対立は早く獲得されること、逆側条件のコとソの対立の獲得は遅れること、誤反応のストラテジーに一貫性がみられること等が見出された。

門松(1979)は、産出実験を行い、コレ、アレは5, 6歳児でも適切に使用できるが、ソレは適切には使用されていないこと、8, 9歳児はコレ・ソレ・アレとも成人と同程度の水準に達していることを示唆した。

遠藤(未発表)は、5, 6歳児(幼稚園年長児)24人を対象に、子供と実験者が距離を隔てて向かい合う対面条件、隣り合って並ぶ並び条件、および、対面条件と同じ位置関係で子供が指示棒をもって指す棒条件、の3つの条件で産出実験を行った。指示対象となる物は、図3のように床上に配置され、子供は「***はどれ?」という質問に応じて指示詞を産出した。

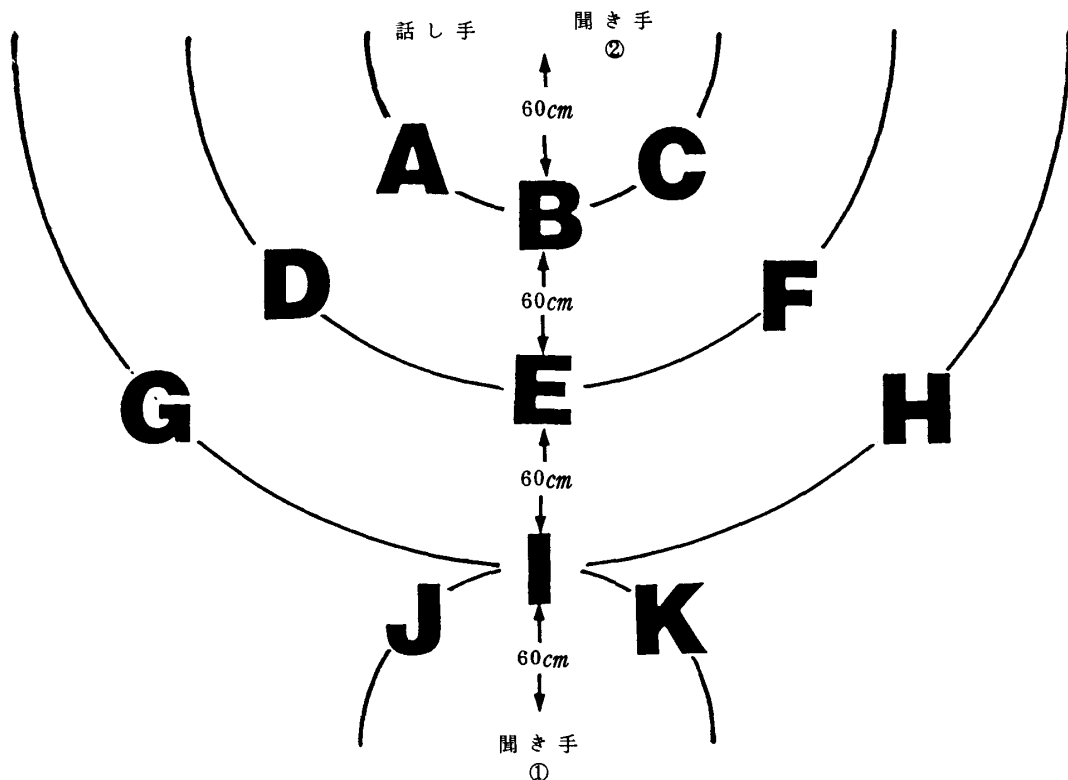


図3 指示対象の配置図

注 ①は対面条件および棒条件、②は並び条件のときの聞き手(実験者)の位置。指示対象A, B, Cは範囲I, D, E, Fは範囲II, G, Hは範囲III, I, J, Kは範囲IVとする。

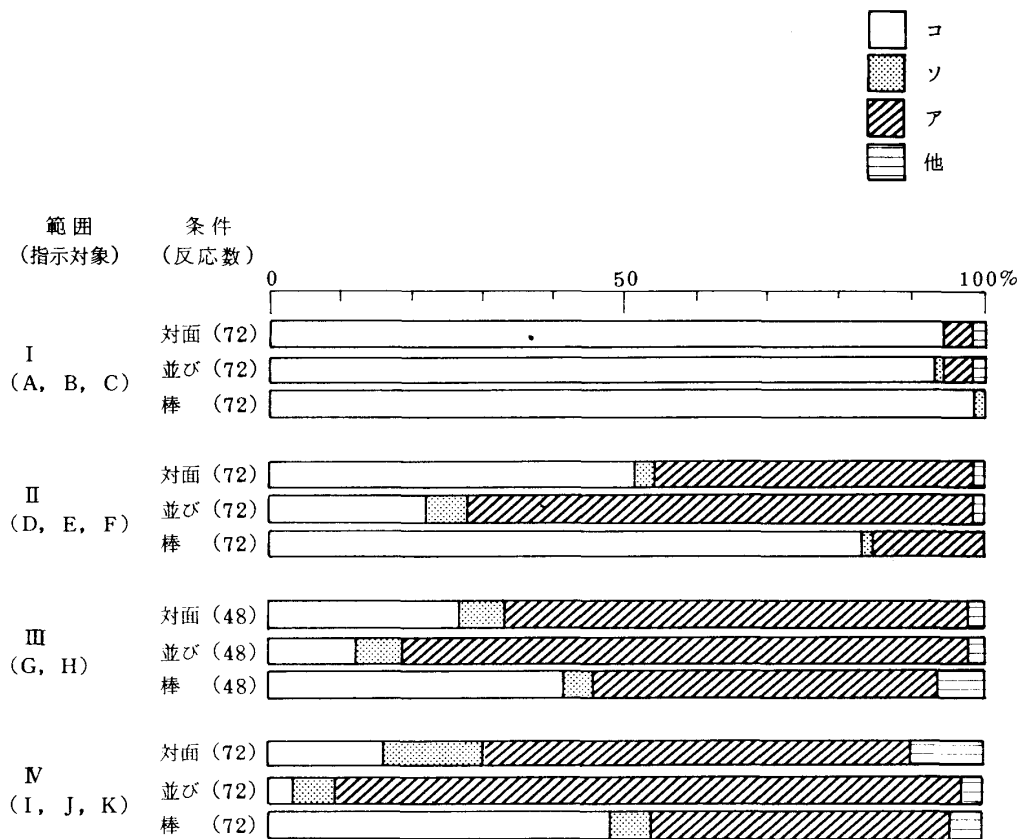


図4 幼児の指示詞コ・ソ・アの使い分け

まず、対面条件および並び条件の結果を見ると、図4に見られるように、話し手である子供に近い範囲Iの対象にはコが多く使われ、子供から遠い範囲IIIやIVではアが多く使われており、これらは、大人で得られた結果と一致する。しかし、ソの使用は全体に少なく、対面条件において実験者の位置に近い範囲IVで、ソの使用が並び条件と比べて有意に多くなるという、大人で見られたような傾向は見られなかった。この結果は、門松の結果と一致する。しかし、齊藤・久慈（1985）や筆者自身の観察では、4、5歳児が、聞き手の近くのもの、あるいは聞き手が手に持っているものをソで指示する例が見られている。そればかりか、実験中はソを用いなかった子供が、実験後、園庭で筆者が腕に抱いていたウサギを指してソレと言ったこともあった。ソの使用には、話し手による聞き手の操作可能性の考慮という微妙な要因が関与すると思われる、実験場面において子供が対象に対する聞き手の操作可能性をどう認知していたかが問題である。このような問題が、日本語の指示詞の意味的対比の獲得に関する実験的研究を非常に困難なものとしていると思われる。

次に、対面条件と棒条件とを比較してみよう。図4に見られるように、対面条件に比べて棒条件では、範囲IIとIVでコの使用が増加した。棒条件では話し手の操作可能性が増大すると考えると、大人と同じように幼児も、話し手の操作可能性の大きさと関連して指示詞コを使っていることが示唆される。

以上、観察および実験から、指示詞ソは遅れて獲得されること、コ・ソ・アの意味的対比は指示詞が最初に現れてから大分後になって獲得されること、が明らかにされてきた。ところで、指示詞ソの獲得がなぜ遅いのかについては、これまで、子供の自己中心性によって説明されてきた。しかし、近年の研究は、乳児でも他者と自己の視点の違いがわかる（Bruner, 1986）、幼児も相手に合わせて発話を調整する（Shatz, 1983）等、子供が必ずしも自己中心的ではないことを示唆してきた。そもそも子供の行動にすべて自己中心性を当てはめるのは不適切であり（Sugarman, 1987）、大雑把すぎて説明にならないと思われる。自己中心性という曖昧な概念によらずに、指示詞の獲得の順序とメカニズムがより適切に説明されることは、

今後の課題である。機能的には、成人の研究で明かにされたようにソには、聞き手の近くを指すという用法の他、話し手から中位の対象を指す用法、照応用法等、いくつもの用法があることが、ソの獲得を遅らせているのかも知れない。言語獲得のためのインプットとの関係からのアプローチも有望である。例えば、人称のダイクシス I/You を獲得する際、乳児が、自分に向けられたのではない発話から学ぶことができることを示唆した研究もある (Oshima-Takane, 1988)。さらに、子供の側から、子供がどのような意味でコ・ソ・アを使い、その意味がどのように発展していくかを、事例的に調べることも興味深い。最後に、実験状況の生態学的妥当性を高めることも課題である。子供が状況を適切に理解できるような設定をしないと、真の姿は見えてこない。

III. 照 応

A. 文 法

指示詞の用法は、ダイクシスと照応に分けて論じられることが多いが、ダイクシスや照応の定義は研究者によって異なることがあるので、注意が必要である (田中, 1981)。

正保 (1981) は、文脈指示 (照応) の指示対象として、先行文脈または先行談話に加えて、観念対象や知覚可能なものをも含めた。そして、文脈指示においても、ダイクシスで紹介した議論と同様、対立型と融合型を想定する。対立型では、自分の縄張り、相手の縄張りとの区別が強く意識され、コ・ソが対立的に用いられる。

(1) a 煙草の火が落ちてあなたのズボンが燃えていますよ。

b こりゃ大変。(正保, p. 82)

(2) a 風邪をひいてしまいましたね。

b そりゃそりゃいけませんですね。(正保, p. 82)

融合型のコとアは、話し手と聞き手の双方が了解している対象を指示するのが本来の用法である。

(3) a 昨日山田さんに会いました。あの人が随分変わった人ですね。

b ええ、あの人は変人ですよ。(正保, p. 84)

(4) では、この件は明日にでも部長に伝えて、意向を伺っておきます。(正保, p. 91)

ソは自分がその対象について直接的知識を有していない場合にも、相手がそれを知らない場合にも使用される。

(5) 僕が行っている英会話学院に、ハワイの先生がいるんだけど、その先生の授業とても、面白いんだ。(正保, p. 114)

普通ならばソで指示するはずのものを話し手がコあるいはアで指示するのは、話し手が対象を、強い関心を寄せて

いる身近な存在である、あるいは、強い関心を寄せている遙かな存在である、とみなしているという心的態度を、聞き手に押しつけているからである。正保はさらに、コ・ソ・アの様々な用法について多くの文例を挙げて説明した。

Yoshimoto (1986) は、対立型と融合型に二分することはしないが、正保の整理をふまえて、以下のように考える。指示対象に関して話し手と聞き手が知識を共有していることを話し手が想定するかどうかでアとソが使い分けられる。つまり、アは、両対話者のエピソード記憶に見いだされることが想定される対象を指す。例外として、「君、あの先生を知らないのか?」のように、聞き手が全く知らない対象を話し手がアで指すこともあるが、その場合は、話し手が聞き手に知ることを迫っていると見る。コは、談話記憶中にある形態と実体を持つ実体を指し、テキスト中に指示対象を目立つものとして提出する働きを持つ。また、後方照応にも使われる。ソは、アによってもコによっても指されないものを指すのに使われる。

コ・ソ・アの照応用法には、ダイクシスと比べて、より多様な用法があり、それらの使い分けを説明する原理を見出すことは簡単ではないと思われる。以上見てきたように、両対話者の共有知識を話し手がどう想定するか、指示対象が情報の焦点や話題の主題であるか、等、使い分けに関わる様々な要因が考えられてきた。しかし、日本語教育への応用を考えると、もっと単純でわかりやすく実用的な原理へと洗練されていくことがさらに必要なのではないだろうか。

B. 実証的研究

照応用法におけるコ・ソ・アの使い分けについて、成人を対象とした実証的研究を見つけることができなかったので、ここでは発達の研究を見ていく。

斉藤・久慈 (1985) は、1, 2 歳児の母子相互作用および 3, 6 歳児の仲間相互作用から様々な指示の用法を取り出したことに加えて、4, 8 歳児を対象に絵本を用いて指示詞の指すものを同定させる理解実験をした。その結果、絵本の文章程度の文脈指示能力は、3 歳から 4 歳にかけて急速に発達し、7, 8 歳でほぼ完成すること、さらに、文章を聞いて理解する課題であっても、4 歳児は絵があればそれに依存するが、5, 6 歳児は文章が易しければ文脈指示ルールで処理し、文章が難しくなると再び絵に依存すること、等が見出された。

久慈・斉藤 (1985) は小学 4 年生、中学 2 年生、大学生を対象に、絵本の文章中の指示詞の部分抜き出して呈示し、そこに適切な指示詞を産出する能力を見た。小学校高学年で 70% 以上が正しい文脈指示が産出でき、中学生で文脈指

示能力は一応完成すること、まず指示語のさす対象の性質を表す次元を習得し、次にコ系、ソ系、ア系といった系を正しく使えるようになることを見出した。

寺津(1983)は、小学校3年生から大学生を対象に、問題文中の指示詞の指しているものを答えさせる実態調査を行った。言語文脈に先行詞が顕在化している場合は小学校3年生でも80%以上が正しく先行詞を決定できたが、言語文脈に先行詞や顕在化していない場合、推論によって正しい先行詞を決定できるようになるのは、高校生レベルからであった。

さて、照応用法についての実証的研究については、以下の点が今後の課題として残されていると思われる。

第一に、発達的には、斉藤・久慈(1985)が相互作用の分析で目指したような、ダイクシスから照応への発達の筋道の解明がある。この発達は、実は、ダイクシスから照応へという単純なものでもないらしい。照応用法の始まりがどのようであり、それがどのように発展していくのか、ダイクシスの使用とどう関連するのか、等について、横断的観察のみでなく、縦断的観察あるいは日誌的資料、および、よく工夫された産出実験等によって明らかにされる必要がある。

第二に、照応におけるコ・ソ・アの使い分けの探究がある。前節に述べたように、文法研究においては、どのような場合にコ、ソ、あるいはアが使われたのかについて、様々な規則が考えられている。しかし、実際に発話者が、何をどのようにして考慮して、どの指示詞を産出するかを明らかにするためには、他の要因を統制した上で重要と思われる要因を操作し、その効果を見るような実験的研究も必要だと思われる。ただ、ここで、難しい問題がある。例えば、話し手と聞き手の共有知識が、照応におけるコ・ソ・アの産出にどのように影響するかを実験的に確かめるとしよう。このとき、話し手と聞き手が何を共有知識として持っているかに関する話し手の知識は統制できるかもしれない。しかし、話し手が情報をどのようなものとして聞き手に呈示しようとするか、すなわち、話し手が、聞き手との共有知識を喚起し、その共有知識を基礎に話を進めようとするか、あるいは、聞き手に共有されていない情報であっても、話し手が、その情報を、強い関心を持つものとして、または、聞き手も当然知るべきものとして、呈示しようとするかどうかまで統制することは困難であろう。しかも、このような要因も、コ・ソ・アの使い分けに影響することが指摘されているのである。このような問題を認識した上で、実証的に使い分けの要因を探究していくことが望まれる。

第三に、指示詞理解の問題として、寺津(1983)や斉藤・

久慈(1985)の取り上げたような、先行詞同定の問題がある。先行詞同定の方略の解明に加えて、コ・ソ・アの使い分けが、先行詞同定の手掛かりとなるのだろうか、あるいは余り関係しないのだろうかという点も今後の課題である。

以上、指示詞コ・ソ・アの使い分けに関する最近の文法的研究および実証的な言語心理学的研究を概観し、今後の課題を述べた。本稿で取り上げたような言語心理学的研究が、さらに積み重ねられることによって、コ・ソ・アの使い分けのメカニズムが、ますます具体的に解明されていくことが期待される。それは、また、会話の産出や理解に関する我々の知識を豊富にすることにもつながる。さらに、このような研究が、日本語教育の何らかの基礎となれば幸いである。

引用文献

- Bruner, J. 1986 Actual minds, possible worlds. Harvard university press.
- Bühler, K. 1982 The deictic field of language and deictic words. In R. J. Jarvella & W. Klein, (Eds.) Speech, place, and action. John Wiley & Sons Ltd.
- 千葉修司・村杉恵子 1987 指示詞についての日英語の比較 津田塾大学紀要 19, 111-153.
- Clark, H. H., Schreuder, R., & Buttrick, S. 1983 Common ground and the understanding of demonstrative reference. Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior, 22, 245-258.
- Ehlich, K 1982 Anaphora and deixis : same, similar, or different ? In R. J. Jarvella & W. Klein, (Eds.) Speech, place, and action. John Wiley & Sons Ltd.
- 遠藤めぐみ 1988 指示詞コ・ソ・アの使い分けにおける操作可能性と聞き手の非人格化の影響 心理学研究 59(4), 199-205.
- 遠藤めぐみ 1989 対話者の操作可能性から見た指示詞ソの使用 教育心理学研究 37(1), 61-66.
- 遠藤めぐみ 未発表 幼児の指示詞コ・ソ・アの使い分けにおける操作可能性の影響 日本心理学会第53回大会(1989年)発表予定
- 芳賀純 1987 コ・ソ・ア・ドの心理的距離の測定 日本教育心理学会第29回総会発表論文集 196-197.
- Halliday, M. A. K. & Hasan, R. 1976 Cohesion in English. Longman.
- 服部四郎 1968 コレ、ソレ、アレと this, that 英語基礎語彙の研究 三省堂
- Higashiyama, A. and Ono, H. 1988 "Koko," "soko" "asoko" ("here" and "there") as verbal dividers of space. Japanese Psychological Research, 30(1), 18-24.
- 匹田軍次 1981 指示詞コソアについて 月刊言語 10(12) 84-94. 大修館書店
- 今井四郎 1979 指示代名詞の指示機能について 北海道大学人文科学論文集, 15, 1-16.
- 堀口和吉 1978 指示詞コ・ソ・ア考 論集日本文学日本語 5 角川書店

- 岩淵悦太郎他 1968 ことばの誕生：うぶ声から5才まで
日本放送出版協会
- 門松俊彦 1979 指示代名詞(これ, それ, あれ)の使い分けについて 東京大学教育心理学科卒業論文
- 影山太郎 1987 語彙の比較とプロトタイプ 日本語学 6 (10月号), 4-12.
- Kitagawa, C. 1979 A note on Sono and Ano.
Explorations in Linguistics; papers in honor of Kazuko Inoue. 232-243. 研究社
- Klein, W. 1982 Local deixis in route directions. In R. J. Jarvella & W. Klein, (Eds.) Speech, place, and action. John Wiley & Sons Ltd.
- 古田東朔 1980 コソアド研究の流れ (一)
人文科学紀要 71 (10), 119-156.
- Kryk, B. 1987 On deixis in English and Polish: The role of demonstrative pronouns. Verlag Peter Lang.
- 久慈洋子・斉藤こずゑ 1982 子供は世界をいかに構造化するか: deictic words の獲得 秋山高二・山口常夫・F.C.パン(編) 言語の社会性と習得 文化評論出版株式会社 221-243.
- 久慈洋子・斉藤こずゑ 1985 文脈指示能力の発達: クローズ法による 日本教育心理学会第27回総会発表論文集 242-243.
- McNeill, D. 1987 Psycholinguistics: A new approach.
Harper & Row, Publishers, New York.
- 三上章 1955 現代語法新説 刀江書院
- 見澤めぐみ 1986 幼児におけるあいまいな指示詞の解釈 東京大学教育学部紀要 26, 245-250.
- 森田良行 1987 日本語教育と代名詞 国文学 52(2), 126-133. 至文堂
- 大久保愛 1968 幼児言語の発達 東京堂出版
- Oshima-Takane, Y. 1988 Children learn from speech not addressed to them: the case of personal pronoun.
Journal of Child Language, 15, 95-108.
- 大槻文彦 1897 廣日本文典 国光社
- 斉藤こずゑ・久慈洋子 1983 母子相互作用における幼児の指示能力の発達: 会話の基礎として
國学院大学教育学研究室紀要 18, 39-55.
- 斉藤こずゑ・久慈洋子 1985 ディスコース知識: 指示能力
昭和57.58.59年度科学研究費補助金特定研究(1)「言語の標準化」研究成果報告書 会話能力研究グループ代表者 無藤隆
会話能力の発達段階 15-39.
- 斉藤こずゑ・武井澄江・荻野美佐子・辰野俊子 1981 2・3歳児における指示代名詞の理解
日本教育心理学会第23回総会発表論文集 258-259.
- 佐治圭三 1971 外国人に対する日本語文法教育
森岡健二・永野賢・宮地裕(編) 講座正しい日本語第5巻 文法編 明治書院
- 阪田雪子 1971 指示詞「コ・ソ・ア」の機能について
東京外国語大学論集 21, 125-138.
- 佐久間鼎 1955 日本語のかなめ 刀江書院
- Shatz, M. 1983 Communication. In P. H. Mussen (Ed.),
Handbook of Child Psychology. 4th ed. Vol. III, Wiley,
841-889.
- 柴田武 1980 ことばにおける構造とは何か 柴田武(編) 言語の構造 大修館
- Shinn, H. K. 1985 The Korean demonstratives *i, ku, cho* and the Japanese demonstratives *ko-, so-, a-, Sophia Linguistica*, 18, 102-112
- 正保勇 1981 「コソア」の体系 日本語教育指導参考書 8 日本語の指示詞 国立国語研究所
- Sugarman, S. 1987 Piaget's construction of the child's reality. Cambridge university press.
- 高橋太郎・鈴木美都代 1982 コ・ソ・アの指示領域について 国立国語研究所報告集71 研究報告集 3, 1-44.
- 寺村秀夫・鈴木泰・野田尚史・矢沢真人(編) 1987 ケーススタディ 日本文法 桜楓社
- 寺村秀夫 1988 文法的誤用例の収集, 入力, 分類, および分析 (中間報告) 昭和62年度科学研究費補助金特別推進研究(1) 研究代表者 井上和子 研究報告(4)「日本語の普遍性と個別性に関する理論的及び実証的研究」
- 寺津典子 1983 談話における照応表現: 照応に関する言語能力の発達について 月刊言語 12(12), 59-66.
- 上野田鶴子・林部英雄・山田洋 1979 指示詞を含む 文の理解について 文部省特定研究言語 研究発表会論文集 1979 35-36.
- 吉田集而 1980 指示詞にみられる空間分割の種類とその普遍性 国立民族学博物館研究報告, 5 (4), 833-950.
- Yoshimoto, K. 1986 On demonstratives KO/SO/A in Japanese. 言語研究, 90, 48-72.
- Wales, R. 1986 Dexis. In Fletcher, P. and Garman, M. (Eds.) Language acquisition: Studies in first language development. second edition. Cambridge university press. 401-428.

謝辞

常に暖かいご指導を頂きました芝祐順教授, 草稿を読んで貴重なコメントを頂きましたお茶の水女子大学無藤隆助教授とCDE研究会の皆様, 厚く御礼申し上げます。また, 遠藤(未発表)は, 常盤台バプテスト教会付属めぐみ幼稚園のご協力のもとでなされたものです。記して感謝いたします。
(指導教官 芝祐順教授)

校正時追記

1. 遠藤(1988)の操作可能性という概念について, 遠藤(1989)は, 定義中の「身体・補助物等を用いて」という部分は, 必要条件ではないように思われる, と述べ, 概念を洗練していく必要を指摘している。
2. 本稿を書き終えた後, 以下の論文を金水先生から頂戴した。日本語のコ・ソ・アをメンタル・スペース理論を用いて論じようとした注目すべき論文である。
金水敏 1988 「日本語における心的空間と名詞句の指示について」および「知識・主観の形成的取り扱い—前稿への修正と補筆」 談話・意味・語用論 昭和62年度科学研究費特定研究(1)「言語情報処理の高度化」研究成果報告